

巨椋池の湖岸變遷と干拓事業 (上編三)

吉 田 敬 市

4 豊公土木工事以後に於ける湖岸變遷

豊公が伏見に築城するに當り、巨椋池沿岸一帯の地域に一大土木工事を施し、平安朝以來殆んど同一な状態にあつた附近の地形を一變せしめた。斯の如き一大工事であつたが今日右的確なる史料なく、其の大部分は徳川初期に編纂された地誌類中に記載されてゐるもの、又は傳説によるものである。今工事の概要を述べると左記の通りである。

一、伏見港市を建設し、宇治川本流を宇治より伏見に導き、(今迄宇治・槇島間より西方小倉村三軒家に流入してゐた事は既に述べた通りである) 宇治・向島間に槇島堤を築き其の流域にあつた幾多の島々を連續し陸續きたらし

めた。そこで巨椋池と木幡沼とが分離した。

二、淀附近の島々を結合させ淀城を築き、淀・伏見間に淀堤を築堤し、巨椋池を南北に二分し、横大路沼と分離せしめた。茲に於て、瀬戸内海は、大阪より淀を経て伏見まで完全に延長した。

三、伏見と向島との間に豊後橋を架け、此より小倉に至る間に小倉堤(太閤堤)を築き、此を以て奈良本街道たらしめた。ここに於て巨椋池は東西に又二分された。

四、淀城を築くに當り、淀附近の地形を一變せしめた。即ち築城以前迄は乙訓郡淀村を主とする西淀と、其の東に島や洲の集りより成る東淀とがあつた。宇治川・木津川は此東淀に

於て合流してゐたのを改めて、宇治川と木津川とを全然分離せしめ、宇治川は城北淀小橋に、木津川は淀新町に流口を作り、そこに大橋を架けた。又巨椋池惡水路を別に設けて、淀小橋附近にて宇治川に放流する事にした。従つて今迄巨椋池は宇治・木津二川の相會する所であつたが、茲に於て巨椋池・木津川・宇治川の三者は各々分離した。然し巨椋池は宇治川と相通じてゐた關係上、洪水時に到れば、宇治川氾濫し逆流するから、巨椋池に浸入する。従つて巨椋池は宇治川（淀川）の洪水を調節する事になる。この見地から豊公土木工事の際も洪水調節用として保存して置いた。かくて明治末年の内務省淀川改修工事迄大體この状態であつた。

五、其他湖岸堤防築造

東一口山田賀正氏方は湖岸屈指の舊家にして其の所藏する文書又は地圖類は、巨椋池研究の好資料となる。其の藏する地圖によつて見

るに巨椋池氾濫による沿岸水害防禦の爲めに一大堤防を築堤した。即ち淀城の南方北川顔より西一口を経て市田の西方を通り、田井に至る長さ三千三百六間の大堤防を天正十年に築いてゐる。此堤防によつて御牧村が水害より免るを得るやうになつた。

其の後佐山村市田方面の水害防禦の爲めに、右天正十年築堤防の外側に同じく、北川顔より、東一口を経て安田に至るものを築いた。今日巨椋池西南岸にある二重の堤防は當時のものである。巨椋池が宇治川と連絡してゐた頃は、此二堤防は、佐山・御牧等湖岸村落の水害防禦第一線の重要な防禦堤であつた。然るに内務省淀川改修工事によつて、巨椋池が全然宇治川と分離し、全く死滅湖に等しくなつてからは、其の重要性を失ひ、今日殆んど顧るものもなくなつた。然るに今や巨椋池干拓事業の着手を見たので、此歴史的記念物たる堤防も全然姿を消すであらう。この意味

よりしても茲に記載し置くの必要を認める。
右湖南の諸邑たる佐山・御牧は其の周邊を全く堤防にて圍繞せられてゐる一の輪中である

六、桂川流路の變遷と大阪街道の開通

桂川は現在の横大路・下鳥羽附近より眞南横大路沿に流れ込んでゐたと言はれてゐる。それを現在の流路に變更せしめ、桂川左岸の堤防上に大阪街道を通じた。そして元横大路・富森は巨椋池北岸に位した漁農的聚落であつたが、前記の淀堤を築き、巨椋池を南北に二分したので、右の諸邑は漁舟的生命を失つた。仍て大阪街道に移し、陸路又は水路交通の至便なる恩恵に浴せしめたのである。右富森横大路等の舊地は尙湖岸に其の俤を残してゐる七、其の他三栖・横大路間に入丁噺を通じ、又

伏見城南崖下に伏見・六地藏經由の東國道を新開した。

右は豊公時代湖岸變遷の太要であるが、湖岸附近地形の大變化を來した事は有史以來の事

である。今日の地形は此時代に其の基礎を作つたものである。

徳川三百年間に於ける湖岸變遷史は右に比べるとあまりに貧弱である。部分的に河川修理吐口・樋門等の建設と、多少の新田開發とはあるが、地圖を變更する程の大變革は少い。只前記の山田家文書によると、宇治川左岸即ち巨椋池の北岸に一大堤防があつたらしい。(寛永五年迄)所が永井信濃守時代に木津川の川違があつた際に其の堤防を切落した。所が御牧村惡水拔きに困り石垣堤を作つた事を記載してゐる。

又寛永五年迄北川顔五軒家から、淀鷹匠町まで大堤があつたのを、淀城御用害の爲め、右石堤を取拂ひ其の代りに石關となした事等が其の主なるものである。

寛永十四年木津川川違

徳川時代湖岸地形變遷の大事件は寛永十四年の木津川流路の變遷である。豊公時代には淀の新町に木津川を流出する様にしたのであるが、

淀城用害の必要上其の流路を變更した。即ち下

城の南に流れるやうにした。そして舊木津川床

池 棕 巨 圖 三 第



津屋附近より藤和田・北川・美豆を経て、淀



は城下民に分けて與へ新町といふ町が出来た。

本津川は爾後約二百五十年間明治元年迄、同一
流路をとり流れてゐた。そして其の河口淀と美
豆との間に淀の大橋を架け、巨椋池及び佐山・
御牧地方の惡水拔きは、前記淀小橋附近に放流
する他、孫橋を通ずる一小惡水路を作つた。

其の他湖岸變遷を知る資料は前記の山田家藏
の地圖である。徳川時代の地圖中巨椋池沿岸を
正確に描いたものは殆んどない。然し右山田家
のものは巨椋池湖岸漁民の争時の上書地圖や、
水利問題に用ひた地圖類で、稍正確なものと見
られる。それによると、當時迄は水位が高かつ
た關係上、又干拓が行はれてゐなかつた爲に、
今日と比較すれば地形上大いに相違があり、面
積も勿論廣かつた。

然し湖の面積は内務省淀川改修工事前迄相似
た状態であつた。右工事によつて、水位の低下
を來した關係上、急に干拓地面積を増した。陸
地測量部二萬分一地形圖の新舊二つを比較する
と、其の間の事情を明かに知る事が出来る。即

ち舊圖は明治二十三年測量、三十年修正である
が、新圖は淀川改修工事直後明治四十二年測圖
のものであるから、その相違を知る上に極めて
正確・貴重なる資料である。

5 明治以後に於ける湖岸變遷

其の第一は明治元年本津川の河道變遷である
右河道の變遷は、巨椋池湖岸變遷と直接關係少
きを以て省略する。然し湖沼の生態的現象より
見れば、假に本津川が此際河道變遷を見なかつ
たとしたら、洪水時に於て淀川の河水停滯、逆
流し、其の氾濫の害は一層甚だしかつたであら
う。そして又内務省河川工事にも影響を來した
ものと思はれる。

内務省淀川改修工事

本工事は巨椋池にとりては曩に豊公大工事施
行と共に二大劃期的大事業にして、附近地形の
變化は勿論、巨椋池にとりては生命を左右する
大工事であつた。又現在施工中の巨椋池干拓事
業も、此淀川改修事業と絶大なる關係にある故

稍詳細に記述したいと思ふ。

抑々淀川改修工事とは何か、淀川は有數の大川にして、其の舟運の便益は利根川と共に我國屈指のものである。其の流域は二府四縣に涉り、流域面積五百四十五方里、其の中に耕地地二十餘萬町步、人口約六百萬を入るる廣大なる流域平野を有し、古來我國文化の中樞地帯を作つた。かく淀川は畿内文化の開拓者であると共に一面非常なる災厄を與へて來た。即ち洪水時に於ける河水の氾濫に伴ふ堤防の破壞、惡水の停滯により直接間接生産・交通・人命財産等に損害を與へし事、古來幾何か測り知れざるものであつた。

明治以前のものは省き明治以後に於ても度々大氾濫を來した。就中明治十八年、及び廿五年の洪水は記録的大洪水であつた。今十八年の記録を見るに其の被害反別攝河平野で約二萬餘町步、琵琶湖岸で一萬二千町步、山城平野にて約九千町步、合計約四萬一千餘町步に達し、湖

岸及び淀川幹線に屬する平坦部耕地の約五割を浸水厄難するの狀態であつた。

而して右の中、山城盆地に關係ある巨棕池、山城三川の水害並に改修工事に關し、大阪土木出張所の淀川改良工事及び淀川高水防禦工事計畫意見書により其の概要を述ぶる事とする。

1 改良工事沿革

明治八年以降十ヶ年計畫にて工費五十一萬餘圓を以て伏見・天滿橋間の工事を行ひ、低水位五尺の水深とし、航行に便する所謂低水工事であつた。後淀川改修工事となり廿九年より工費約一千九萬餘圓と十五ヶ年の日月とを費し、明治四十三年全部完成した。其の工事は高水防禦工事とした。此目的は沿岸湖岸の水害を防ぎ、併せて惡水停滯を除くにあつた。

2 各河川の最大流量並水理概要

宇治川最大流量 毎秒時 三萬立方尺

(瀬田川最大流量 二萬五千立方尺)

桂川最大流量 〃 七萬立方尺

木津川最大流量 ヶ

十三萬立方尺

三川合流後は約二十三萬立方尺であるが、三川同時に最大流量になる事はないから、約二十萬立方尺を以て淀川幹線の最大流量とするのである。右宇治川が極めて少なき理由は、琵琶湖の調節作用に基くものである。

3 琵琶湖調節作用

琵琶湖は面積四十六方里にして、湖面一寸の水量は約七億八千百萬立方尺、假に此水量を一晝夜に減少せしめんには一秒時九千六百萬立方尺宛放流するを要する。而して瀬田川の最大流量は二萬五千立方尺であるから、此を連續流出せしめて、湖面一寸の水量を遞減せしめんとせば八時間四十分四十秒を要するのである。

次に琵琶湖の注入量と排水量との關係を見るに明治十八年洪水時に於ては、最大一晝夜一尺四寸増水し、此騰昇に對する貯水量は毎秒時平均十二萬六千立方尺である。此時の瀬田川放流量は最大二萬立方尺であつたから結局總注入量

は毎秒時平均拾四萬六千立方尺である。此に對して右放流量は一割三分七厘に過ぎない。而して計算の結果によれば琵琶湖總雨量の約五割五分は湖水に停滯する事が知られた。

右は琵琶湖が淀川高水流量に及ぼす影響である。其の低水流量に及ぼす影響を見るに、明治二十六年調査によれば、木津川は渇水に際し其の流量毎秒時八百立方尺、桂川は同じく五百立方尺といふ減水を示し、全然舟航不可能となる。宇治川は之に反し、湖水よりの流出するもの毎秒最少五千立方尺以下に減少する事がない。従つて舟運に不便を來さない。

右の二つの事實に依つて、琵琶湖の調水作用をなす事實は明かとなる。

4 琵琶湖岸浸水と瀬田川の浚渫

琵琶湖の洪水は常水位以上三尺を普通洪水とし、六尺を非常洪水とする。而して常水位より高くなれば湖岸浸水の害あり、之より低ければ害なし。即ち湖岸水害の輕重は、常水面以上湖

の水位の上下に比例するといふ事になる。湖面は春より中秋までに水位を嵩み、冬季中最低位となり、常水面下一尺五寸内外迄降下する事稀でない。依つて此水位と水害との關係より考察して、冬季に常水以下三尺減水せしめて置くと、多雨期に三尺増水しても結局平水となり、六尺増水しても單に三尺嵩み普通洪水となる程度の水害に終る。

依つて瀬田川を浚渫し右の最大流量を通過せしむる丈の工事を施した。同時に洗堰を設け、有時の時は遮斷し、又解放する事とし、下流危険を防ぎ一方水量を調節する事が出来る。又理論上、實際上此洗堰の作用により、琵琶湖岸に浸水の害なく、他方下流地方に洪水の厄を調節し、減水時にも或一定の水位を保たせ舟航に事缺ぐ事がなくなつた。

5 宇治川及び巨椋池沿岸の改修工事

宇治川水面勾配(改修前ノ調査)

海口―伏見間(十二里三十三丁)千尺ニ付落差

〇・二―〇・三七四尺

伏見―宇治間(一里十九丁)〇・四二四尺

宇治―鳥居川間(五里三十二丁)〇・三・〇三

二尺

右表の通りであるから此平均勾配を保たせ新河道を設け舟航に便ならしめた。其の工事は左の通りである。

一、宇治川を淀町の南側に回流せしめ桂川との合流口を引き下げた事。

二、向島の堤防を延長して大池洪水の氾濫を遮斷した事。

三、巨椋池の悪水排除の爲め、新宇治川の左堤に沿ふて水路を新設し、下流は水門によつて宇治川に通じてゐる事。

扱て右第一の宇治川回流は本工事中最大工事の一であつた。伏見觀月橋下流より一直線に淀の南部を通り、八幡にて木津川と合流せしめ、其の間の新川堤長は約四十四丁である。かく附替をなした根本の理由は桂・宇治二川が淀小橋

西方に於て合流してゐたので、常に水吐が悪く、一朝洪水あれば附近の低地は悪水停滯し、作物腐死する事を例とした。此滯水を排除するの目的を以て、其の合流點を引き下げたのである。右の目的達成の爲には宇治川河道を附替せずとも桂川の附替を施しても同一目的を達するが、桂川を假に附替ると、其の河敷として良田三百數十町歩を費すので、此見地より宇治川附替を行つた理由である。新宇治川敷は概して巨椋池内の一部であつて、卑濕地で良田でなかつたので此を選んだものである。

大池の水域面積は約四千七百町歩にして、其の水面積低水にあつても約一千百町歩、明治十八年の洪水時には約三千町歩湛水し、低水面上約十四尺嵩増し、毎秒時約九千立方尺の割合を以て注入した。宇治川が増水すると流量は二つに分れ、一は巨椋池に注入し、其の湛水を増し一部は下流に流れる。大池増水の有様を見るに、増水の初は増嵩量急騰するも次第に減少し、宇

治川水位が最高點に達する頃は緩慢となる。此初に増水急なのは、一は宇治川より逆流するものと、湖域受水區域の雨量との和となるからである。而して水位頂點に達する前の上昇度は、一時間一寸内外なれば、毎秒時約九千立方尺宛となる。

右の他琵琶湖が瀬田川の流量に及ぼす影響より推して、大池が淀川の流量に及ぼす影響を計算して一秒間巨椋池は宇治川の最大流量を約一萬三千立方尺輕減する事を算出してゐる。何れにしても巨椋池は毎秒時宇治川の洪水を九千立方尺乃至一萬三千立方尺輕減し得る事となる。かく見るに巨椋池は確かに洪水の調節作用をなしてゐた。

右の通り淀川に及ぼす影響大なるも、亦水理に關係あるかと言へば然らず、一面此調節作用に伴ふ湖岸浸水の爲に巨椋池沿岸の被害甚大である。即ち洪水調節はする。然し調節の爲に反つて其の害が大となるといふ結論になる。仍で

洪水の調節は上流瀬田川で行ふ方が遙かに有利である。瀬田川を遮斷すると琵琶湖岸に浸水七寸五分に及ぶ時は湖岸浸水反別千三百町歩を増すが、家屋の損害はない。之に反し大池にて調水する時は湖岸の浸水約二千町歩になり、佐山・佐古・市田・御牧等浸水家屋多數を數へ、其の損害前者に優ること遙である。

茲に於て巨椋池の存在は洪水に對しては有害無益といふ結論を得る。依つて此を全然宇治川と分離せしめた。そして其の惡水路は、前記の通り新宇治川堤に沿ふて八幡附近にて宇治川に放流する一水路を開鑿し、惡水の放水路とした。其の宇治川に出口には閘門を設け、洪水時には自然に閉扇する仕掛になつてゐる。そこで巨椋池は全然死滅した事になつた。然しそれが爲めに湖岸の田畠、民屋は洪水の危難より完全に免かれるを得た。従つて既に述べた湖岸の大堤防は全然必要なものとなり、洪水時用に用意されあつた湖岸聚落用の舟も亦其の役を失ひ厄介

物となつた。

四、水害と湖岸聚落

元來水害には二様あつて、上流の堤防破壊に伴ふ氾濫亂流と、惡水湛水による被害に分たれる。巨椋池沿岸の被害は淀川の逆流其他による惡水の湛水である。従つて堤防決潰の如く猛烈なる奔流にあらざれば家屋人畜を流す事は少ない。然し十日、二十日と停滯し、遂に作物は腐枯し、家屋・財貨に及ぼす影響亦少からず。茲に於て古來沿岸民は此洪水の暴狀に脅かされてゐる關係上、堤防築上の他、民家の構築に注意を向けてゐる。今湖岸一帯の聚落を見るに、殆んど總て家屋は盛土をした上に建て、周りに（多くは北西側に）樹木を植えてゐる。此は全く洪水時に對する湖岸民の用意である。其の盛土の高さは大體湖岸に近く高く、湖岸より距るるに従ひ低い。而して木津川堤近くになると右盛土は殆んどなくなるといふ珍現象を呈してゐる。

各聚落に於ける右盛土の高さを測定し、湖を中心に同心圓を畫き、その上に右聚落と盛土の高さとを記入し、(海拔高距を考慮して)其の斷面圖を作製する時は、湖岸に近き程盛土の高さ大である。即ち斷面高の長大なるもの程、洪水に對し危険である。換言すれば斷面線の長さは、水害の危険度に比例するといふ事になる。

然し今や右の如き盛土の必要もなく、新築家屋は殆んど盛土を行はず、舊來の民家は今日から見れば普通路面より高い丈け不便となつてゐる。然し此も過去に於て巨椋池の與へた影響で、地人相關の現象は茲にも見出す事が出来る。

かく内務省淀川改良工事は巨椋池沿岸に於ける地形の一大變更を來せし一大事業であつた。此によつて水害を完全に豫防し、過去幾千年盆地内住民の困窮せし痛も茲に除去され、沿岸住民は始めて安かな眠を得、水田は良穗を實らす事を得るやうになつた。

(完)

註

巨椋池の湖岸變遷と干拓事業

- ① 山州名跡志、都名所圖會、京師巡覽集、山城名勝志等。
- ② 豐公淀築城前既に永正年中細川氏、元龜年中岩成主税等此所に居たことあり。然し其の詳細を傳へず。
- ③ 吉田敬市、淀附近の地形變遷と奈良街道の變更、歴史と地理。
- ④ 山田家古文書、稻葉神社文書。
- ⑤ 稻葉神社文書、田邊密藏氏に據る。

新町の戸割の古圖は同町横山氏保管

- ⑥ 明治元年洪水の爲め生津附近より西北八幡方面へ流下し翌二年より現在の流路となる。
- ⑦ 詳細は拙稿淀附近の開発と奈良街道の變遷、歴史と地理(昭和八、九)參照。

⑧ 乙訓郡桂川沿岸の平坦面に行はれた耕地整理組合記録によると、雨量三十糎以上に及ぶ時は雨後十三時間にして氾濫し、淀川の水面上昇と共に水吐を不可能ならしめ、遂に停滯湛水する。湛水の甚だしきは六尺に及ぶ。巨椋池湖岸は推して知るべしである。

- ⑨ 詳細の記述は稿を改めて他日に譲る。